

共生の新時代を拓け

総合科学部長 渡部三雄

総合科学部を卒業する諸君、総合科学部関連の大学院研究科を修了する諸君、卒業、修了おめでとう。

就職し美社会に旅立つにせよ、進学しさらに学問を深める道に向かうにせよ、諸君がこれから活躍を目指す世界は、決してバラ色とは言えない。時代はいま、深刻化する地球環境問題、激動する政治・経済・社会情勢、頻発する世界各地の地域紛争など、まさに世紀末を象徴する混沌の中にあり、二十一世紀を目前に控え、大きな変革のときを迎えている。

人類どうしの共生だけでなく、人類と他の生物との共生、さらに自然界すべての共生に向かって、人間の生き方、ものの見方・考え方、学問研究のあり方、科学技術のあり方など、あらゆる面での変革が求められている。

このような状況に的確に対処し社会に貢献するためには、既定の考え方にとらわれず、グローバルな視点から広い視野で物ごとをとらえる力が必要である。学際性、総合性、創造性を学部理念の柱とし、複数の学問分野にまたがる学際的な領域や、既存の学問的枠組みを超えた新領域への知的関心の喚起と育成を教育目標とする総合科学部で学び、研究に従事した諸君にとって、このような変革の時代は、実力を発揮する格好の場となるはずである。

諸君の先輩たちが一昨年の学部創立二十周年を記念して寄贈し、総合科学部正面玄関に



置かれている石碑には、「ひろだいそうかはせかいにひとつ」と刻まれている。新しい共生の時代を切り拓くのに最もふさわしいユニークな学部に学んだことを誇りにして諸君が活躍し、廣大総科の輝かしい伝統をさらに築いてくれることを祈っている。

懸賞論文に入選して

生物圏科学研究科博士課程前期

赤井裕

一九九四年六月。「電話ですよ」と呼び出され、赤煉瓦の巨大な建物（知る人ぞ知る薫風寮）の入り口にあるピンク電話の受話器を取り上げた。「おめでとう入選（二十一世紀のエネルギー・環境問題を考える）よ。…」

一か月後、目の前には黒ビールとソーセージがあった。副賞として独仏英の三か国を十日間でまわるのであった。各国でそれぞれ異なる印象を受けた。文化に触れるにはあまりに短い期間であったが、「日本は欧米を模範としてきたんだから、行っても勉強になら

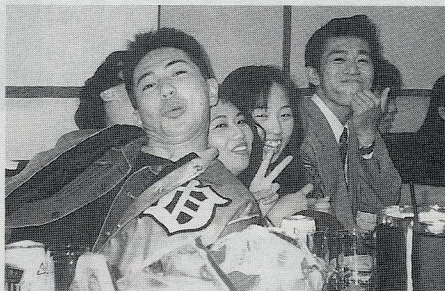
私の大学生活について

刺激を求め続けた四年間

総合科学部 豊田庄吾

在学中、わたしは常に刺激を求めていた。「新しいことにチャレンジすること」「友だちと語ることで、いろいろな人の生き方にふれること」がそうである。

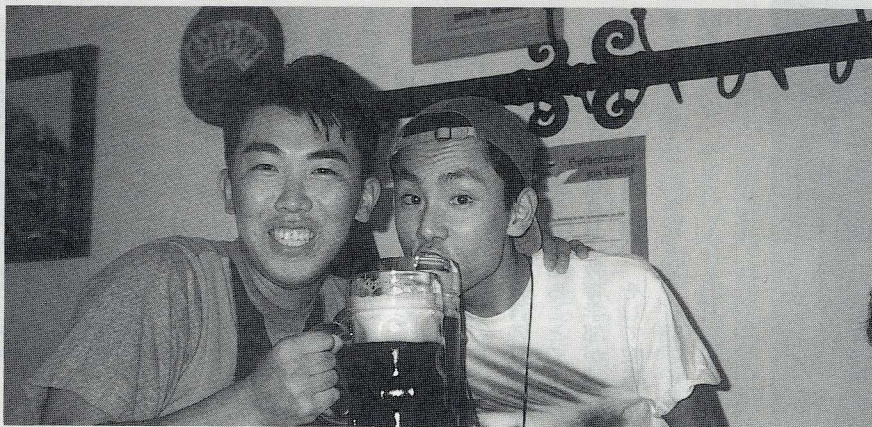
オリキャン、大学祭での企画、学外の企画サークル、「やれる」と思ったことはすべてやった。一つの企画をたくさんの



友だちと一緒にやることで、まわりの人からいい意味で刺激を受けた。イベントや行事に参加することで友だちの輪も広がった。

「オリキャンや大学祭に替わる、学部としての枠を超えた『広大としてのアイデンティティ』を感じることができる行事を作ろう」と考えていた私は、いつでもその「広大らしさを感じる」ことができる「行事」をやれるよう、各学部で目立っていた人や、仕切っていた人と友だちになろうと考えた。友だちを数多く作るために費やしたお金と時間の多さは、誰にも負けないつもりである。

駆け足で過ぎた四年間であった。



「一年が過ぎ、先輩、僕も入賞しましたよ」と同じ早瀬研の山西君に言われ、びっくり。来年の入賞者には何のお土産を頼もうかな。「旅の楽しみはトラブルから」と考える私にはちょっと…。